

刀 富田備中守橋康廣

(菊紋)

撰津 實文

「紀伊国富田康廣、寶永三年八月日」

「紀伊国康廣、以南蠻鍛造之」

「備中守橋康廣」

「紀伊国康廣、(菊紋)備中守橋朝臣」

「富田備中守橋康廣、(菊紋)」

「備中守橋康廣、(菊紋)實文十三年八月五日」

富田五郎左衛門。

紀州石堂、大攻石堂。紀州から大攻移住。

紀州大攻の石堂を代表する鍛冶。初期作は

「富田康廣」とも切り、備中守を受領してからは

表裏に銘を切り分け、表に作者裏に菊紋を切る。

平成二十七年五月十五日

刃長 73mm (二尺三寸三分六厘)

先重 0.49mm (0.46mm)

差長 21.5mm

鑑定刀 反り 2.5mm (七分三厘)

切長 3.5mm

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

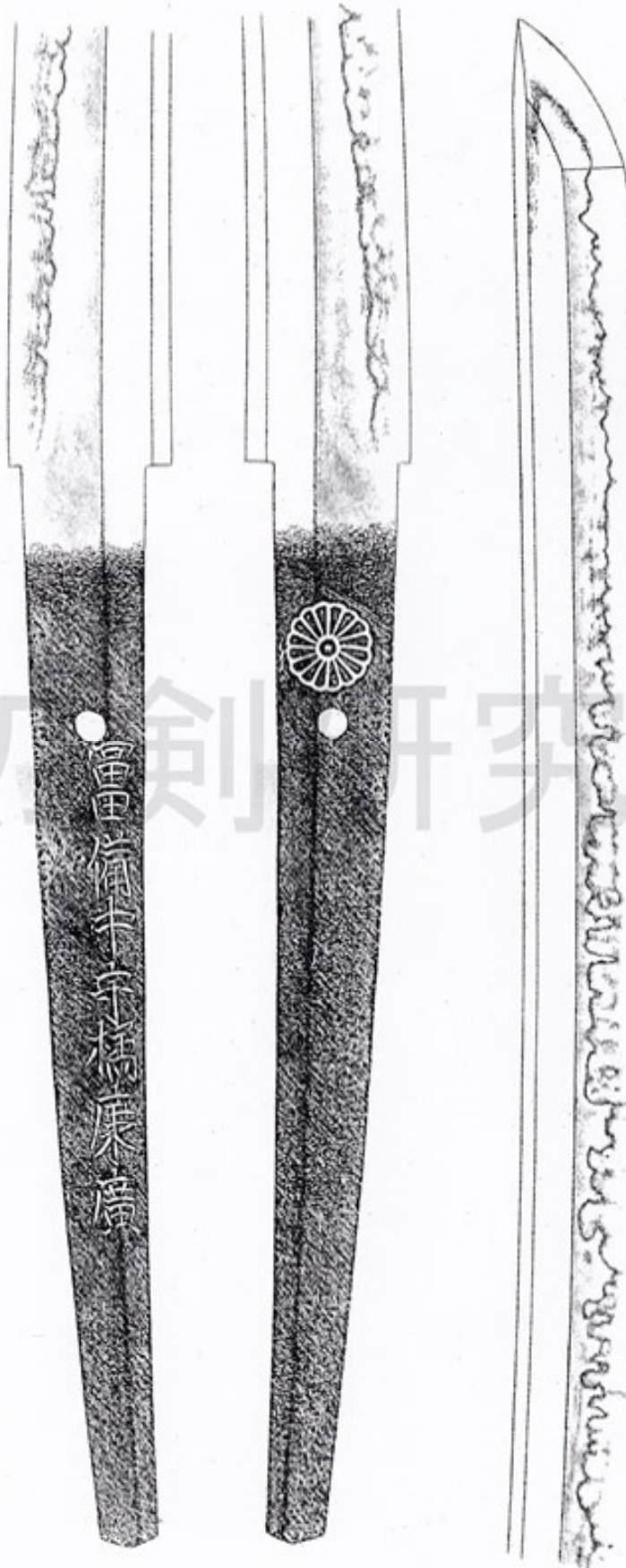
先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

富田備中守橋康廣



鑑定刀

反り 2.5mm (七分三厘)

切長 3.5mm

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

差重 0.22mm (0.22mm)

差重 0.33mm (0.31mm)

元中 3.07mm (2.73mm)

先中 2.61mm (1.77mm)

元重 0.24mm (0.68mm)

鑄造、庵棟尋常、鑄中鑄高は尋常、重ねは厚めに身中は心持ち葉めの造込みとなり、元中と先中の差は少く切先は中切先でフクラは枯れかけん、反りは中間反りが高く腰反りを加えてやや踏張りのついに空となる。地鉄は小破目に流れた狂目を交えてよく約オ、細かな地割が厚くつゞき世帯が沈む、乱れ映りが強く表われ、濁りが有り、明るい。刃文は小波状束の焼巾の広い丁字乱れて、焼出しを焼き、刃中足葉よく入り、砂流しを交じえる。匂口は深めで明るい。帽子 表は浅く乱れて裏は直刃、表裏の先は尖って返る。差は生ふ、長寸で反りがつき(刃方をたたく)、鑄中は狭く鑄高は尋常、先を狭めて差戻は剣形に近い山形、刃角小肉、棟角小肉、鑄は筋違、表は磨出しに比較して先角差は急、鑄目の深さは磨出しが深めて銘の下からはやや浅い、目釘之は一、銘は鑄筋にかぶせて長銘を切り、表は目釘穴の上に菊紋を彫る。此、刃は出来良く、健全。



小脇指 若狭守藤原氏房

元龜二年八月日 (一五七二)

美濃 兼房

「兼房」濃州肉庄兼房作

「氏房」左衛門尉藤原氏房

「若狭守藤原氏房」氏房入道

京三郎・清左衛門

善新兼房(永正・清左衛門・三右衛門・

肉鍛右惣鏡家と稱す)の三男

天文三年濃州坂平に生れ、ほどなく

肉に移る。

永祿十三年四月十九日左衛門少尉、

同年 四月二十二日若狭守を尊領、

天正十八年五月、清州にて没、五十七歳、

平成二十七年五月十五日

刃長 31.7cm (一尺二寸四分六釐)

莖長 10.1cm (一〇・一釐)

莖元重 0.64cm

平造、巻棟脊帯、身巾は広く重ねの尋常な造込みとなり、

地鉄は小極目に小歪、刃よりは極目を交えて細かく肌立ち、

明るく牙える。

刃文は匂ふ米の兼房乱れて汗を棟を戻く、丸れり谷は細かな砂流しを交じえ、

明るく牙えて締る。

彫刻 表裏に極流しの刀樋を極く。

莖は生ふ、刃方を張らせかげんに先巾を狭め、莖尻は刃上り粟灰、

鑑は筋違、磨止しに比較して先の筋違は急にはなる。目釘元は二、

表は製作年紀を切る。此鉄は透さとおるよりに牙えて美しく、

鑑定刀

反り 0.26cm (九厘)

莖尻 無し

莖先重 0.32cm

元巾 2.71cm (二・七三釐)

莖中 2.57cm

莖先中 1.39cm

元重 0.62cm



短刀 宗夕国宗

越中 文明

四代

国友子

光心

文明から長享の作がある。

平成二十七年五月十五日

刃長 29.8cm (九寸七分六厘)

茎長 21.0cm (七寸)

平造、三ツ棟 棟筋もおろしし尊等、身中は広めて重水の尊等な造込みとなり、フクラは尊等て反りの浅い造。

此鉄は小坂目に流れた板目を交じえて肌立ち、水滲が厚くついて必景が沈む、鉄は黒く明るくよく練れる。

刃文は湾曲に互の目、所々乱れの谷は刃先に抜け、表裏の刃がよく揃い、刃中は足と葉が入り、金筋・砂汰しを交じえる。

小滲がよくつみや大粒の滲がつき匂いは明るく冴える。

帽子は滲れて先は小丸で尖りがけんに返る。

彫刻 表は梵字に素剣、裏は梵字に護摩者。

茎は生ぶ、重ねは厚く中は広めて、うっすうと向がつき、茎尻は棟側を丸くした葉尻、刃角小内。棟丸 ()

總は勝ち下り、磨出しに比較して先の角度は深い。目釘元は一、銘は独将の書風で目釘元の下茎に、ばいに大きく切る。

地・刃は明るく冴え、滲は煙めて大小の変化がある。

鑑定刀

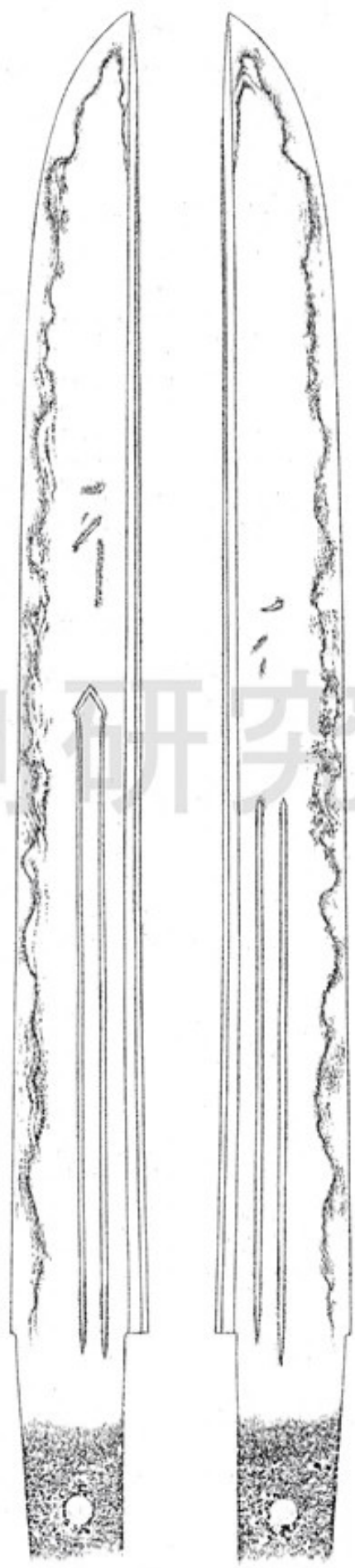
反り 0.2cm (三厘)

元重 0.22cm

元中 0.2cm

元重 0.6cm

茎長 10.7cm



刀劍研究連

短刀備州長船康光

応永三十二年八月日(一四二五)

備前 応永

「康光」「備州長船康光」

「備州長船住右衛門尉康光」

・三内小反重吉子

・長義の孫

・長清「備州長船長清」五郎左衛門尉

長義内人

牙誦説がある

大業切

平成二十七年五月十六日

平長 22.2(七寸三分三分)

差長 9.0(九寸)

平造、三ツ棟棟筋の中は狭くおろしは急、重ねと身中の尋常な造込外となり

及りの無い短刀の姿となる。

地鉄は小板目に小至、所々板目を交じえてやや肌立ち微塵の地池が厚く、細かな世景が肌にあい、軟らか味のある

乱れ映りが淡く表われた、明るく美しい鉄となる。

刃文は至の目に丁字、乱れの腰の角は峻しく砂流しが交じる、足はあまり目立たず、匂口は明るく冴える。

彫刻は表裏に整った深いイヤイヤとした梵字を彫る。

茎は生ふ、重ねは厚めて先中は広く、茎尻は刃上り栗尻、刃角小内、

鑢目は勝手下り、目釘孔は三孔、銘は茎の中程から細整って表裏に切る。

健全で明るく冴えた地鉄と焼刃は見事、また力強い梵字が錦上華を添えている。

鑑定刀

反り 無反り(内側に0.5mm)

元中 2.0(2.1)

元重 0.6

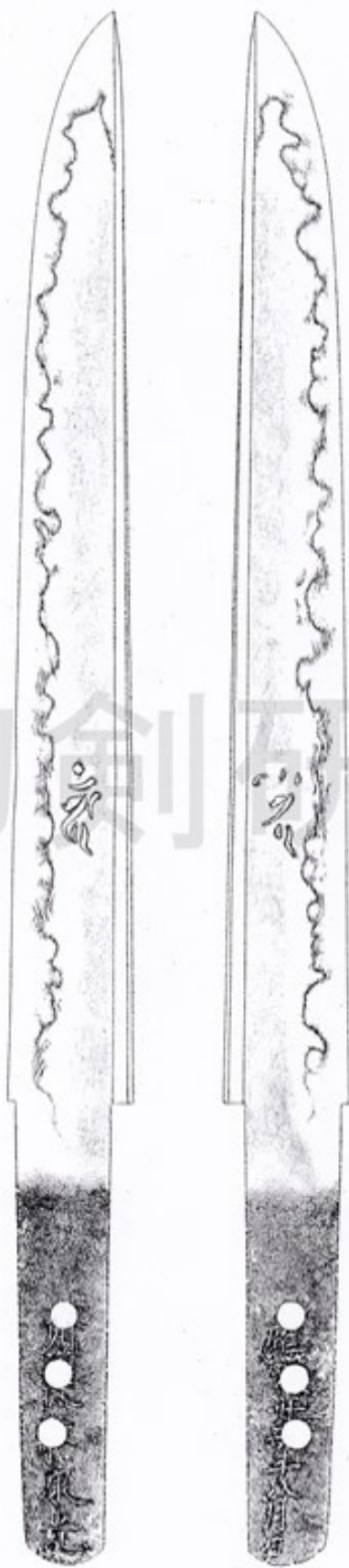
差元中 1.2

差中 1.0

差重 0.6

差先重 0.5

刀剣研究連



棟角 一

短刀 備州長船清光

天文十八年八月日(一五四九)

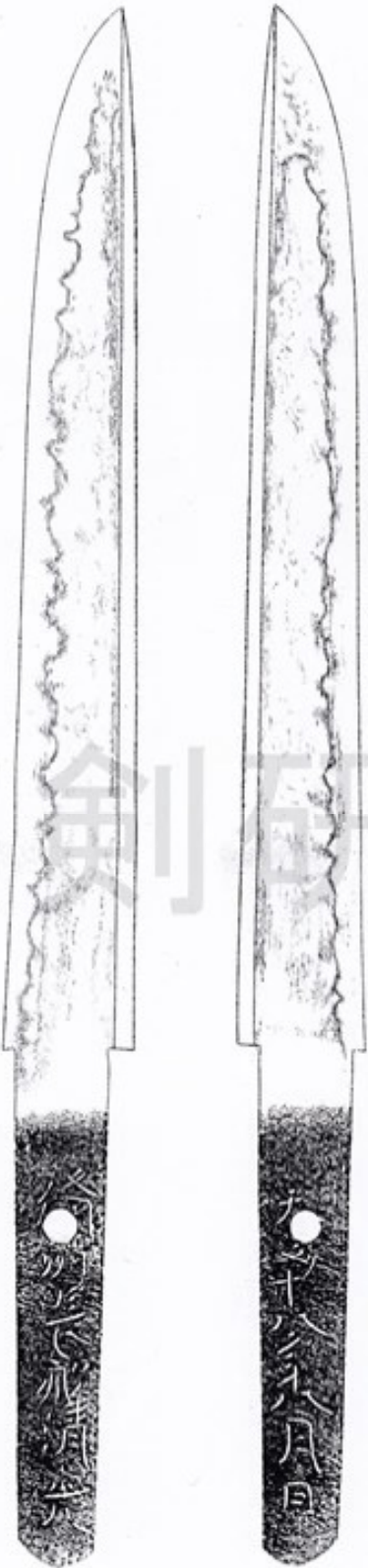
備前 天文

。天文の清光は
五郎左衛門尉、孫右衛門尉、
左三左衛門尉、源五郎、
孫左衛門尉、左衛門尉、
甚助、彦兵衛尉、等がいて、
。天文に続く、弘治・永禄には
左兵衛尉、三郎左衛門尉、
五衛門尉、孫兵衛尉、
弥右衛門尉、等が、る。

平成二十七年五月十五日

鑑定刀

母長 19.6cm (六寸四分六厘) 反り 内反り 0.2cm (四厘)
差反り 無し 茎元中 1.4cm 茎先重 0.6cm 茎先重 0.5cm
平造、庵棟薙草、重ねは厚めて身中は狭めの造込外となり(鐘通し)、フクラは枯れて内反りの姿。
地鉄は板目に至目を交じえて肌立ち、地景は底に沈み、肌から見て淡く乱れ映りが表われる。
刃文 表は互の目に丁字、裏は湾れに互の目丁字、所々角張る刃が交じり、刃中は砂流しと小足が入る。匂口は小沸が
よくつぎ明るい。
帽子は乱れて長く返る。
茎は生ふ、元中と光中の差は少なく、茎尻は刃上り栗尻、刃角 11 棟角小肉 (山)
纏は勝手下り、目釘元は一、銘は独時の書風(自身銘)で大きく表裏に切る。
内反り短刀の代表的な姿で也・刃健全。



刀剣研究連合